

〔特 集〕

シンポジウム 福祉社会を築く

～その担い手と主体形成～

報告 1：福祉国家と福祉社会の新しい関係を求めて

武川正吾（東京大学大学院人文社会系研究科）

報告 2：福祉社会とNPOの役割

北村裕明（滋賀大学経済学部）

報告 3：生涯学習と主体形成

築山 崇（京都府立大学福祉社会学部）

司会進行（コーディネート）：小沢修司（京都府立大学福祉社会学部）

コメント：小野秀生（京都府立大学福祉社会学部）

高原正興（京都府立大学福祉社会学部）

2002年3月2日（土）、京都駅前のカンパスプラザ京都において、京都府立大学福祉社会学部が主催する表記のシンポジウムが開かれました。

全国で初めて、かつ唯一の名称を持つ福祉社会学部が発足したのは、1997年4月のこと。その福祉社会学部が、広く府民を対象に開く最初のシンポジウムでした。テーマは、学部の特徴を前面に打ち出し、21世紀を迎えて人間の福祉向上を図る福祉社会のあり方が問われている中、これからの分権化時代にあって、地域で福祉社会を築いていくために欠かせない「福祉社会の担い手と主体形成」に焦点をあてたものでした。

以下は、シンポジウムの記録をもとに原稿化したものです。

高原正興（総合司会：京都府立大学福祉社会学部教授）

シンポジウム「福祉社会を築く～その担い手と主体形成～」を開催させていただきます。最初に、京都府立大学学長井口和起より、ひとこと、みなさま方にご挨拶申し上げたいと思います。

井口和起（京都府立大学学長）

京都府立大学の井口でございます。本日は、

福祉社会学部が初めて学部主催で大きなシンポジウムを開催することができましたことを、大学の一員として大変嬉しく思いますと同時に、お集まりいただいた方々に心から御礼申し上げます。

福祉社会学部が生まれましたのは5年前の1997年です。本学の将来構想に基づいて新しい学部を誕生させるということで、文部省に認可申請を行い、その許可を得て成立をいたしました。ちょうど今年の3月に最初の卒業生を出しました。そして、同じく昨年から大

学院の修士課程ができました。またいま、来年度4月に博士課程をも設置しようという計画で準備中であります。ですから、新しい一步を踏み出したところですが、最終的に大学院の博士課程までできると、学部から研究科までをそろえた、日本の最も普通の大学の姿として完成するということになります。

私のほうから多くのことを申しあげることはないのですが、ただ本学の将来計画をつくる際に、他の学部もいろいろ参加をして検討を行ってきたものですから、いくつかのことが思い出されます。

とくに従来、社会福祉という言葉が随分一般的でして、現在の学部の基礎をなした1つが、私もおりました文学部に、私は史学科でしたけれども、社会福祉学科という学科がありました。それに、女子短期大学部の生活経済科、教養のパートが一緒になり、また新しい先生をもお迎えしつつ、福祉社会学部というのができたわけなのですが、そのときに最もたくさん議論したのは、なぜ社会福祉ではなく福祉社会であるかという議論でありまして、文部省を説得するのにも随分議論をいたしましたし、ここにいる先生方から教えられたりしました。また、受ける福祉ではなく、創る福祉なのだということが、よく聞かされました。

今日はおそらく、その中身を一般的に言葉や論理の言い替えだけではなくて、つまり福祉社会というふうに問題を立てると、いままで見えてこなかったことのどういうことが鮮明に見えてくるかということが、21世紀の新しい社会、展望を持った社会をつくり出して行く上で、どんな役割を、そのときにおいて果たすことができるのかを、たぶん、いろんな方面から豊かに私たちに語りかけてくださるだろうということを期待しております。

最後になりましたけれども、今日のシンポジウムのために、わざわざお越しいただいて、大変お礼もできないような状態ですけれども、東京からお見えいただきました、東京大学の武川先生。それから日ごろ、非常勤講師としてもお世話になっておりまして、それだけに何となく頼みやすいということもあって、気軽に頼んだかもしれません、大変ご迷惑をかけております、滋賀大学の北村先生。高いところからではございますが、心から感謝をいたします。どうか、ご遠慮をなさらず、我々の大学の側で考えている意見に対して、外から厳しいご批判も含めまして、ご援助を賜ればありがたいと思います。

あまり時間を取ってはなりませんので、私の開会にあたってのご挨拶は以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

高原

ありがとうございました。

それではもう1人、続きまして、本学部の学部長を務めております山田耕造より、みなさま方にご挨拶申し上げます。

山田耕造 (京都府立大学福祉社会学部長)

福祉社会学部長を務めております山田でございます。

主催者を代表いたしまして、ひとことご挨拶を申し上げます。

本日はご多忙のなか、また土曜日の午後という貴重な時間帯に、本学部の開催するシンポジウムにご参加いただきましたことを、学部を代表いたしまして、心より御礼を申し上げます。

さて、私どもの学部は、いま学長からのご案内をいたしましたように、5年前に創設されました。昨年3月に初めての第1期の卒業

生を送りだしたばかりで、また大学院はようやく昨年4月に修士課程が設立されたという、非常に歴史の浅い学部でございます。

しかし、私どもの学部は、これまでにございました福祉関係の学部、あるいは学科には見られない、きわめてユニークな視点を持った学部であると自負しているところでございます。

と申しますのは、これまでの福祉系の学部、学科は、社会福祉実践の担い手を養成していくことに力点を置いてずっとやってきたところなんです。ところが本学部は、そういう社会福祉実践の担い手を養成することだけでなく、来るべき福祉社会を実現するために必要な幅の広い視野と知識を持った人材を育成し、また、それに合わせて、福祉社会の在り方について学問的に探求をしようということで設置をした学部でございます。

そういう点で非常に、本学部はユニークな学部でございます。現在、我が国で福祉関係の学部で、福祉社会学部という名前を付けているところは、私どもの学部だけでございます。

では、学部を5年前に作りますときに、なぜ、社会福祉学部とせずに福祉社会学部としたのかということでございますが、その時代的社会的背景について簡単に触れさせていただきます。

ご承知のように戦後、第二次大戦後、イギリスを嚆矢とした「ゆりかごから墓場まで」ということで、いわゆる福祉国家というものが形成をされていったわけですが、それが1970年代の、いわゆるオイルショック等の前後、福祉国家というものが、様々な問題点、あるいは限界があるということが言われ出してきました。

福祉という問題は国家だけではやれるもの

ではない。やはり、社会全体が福祉という問題について取り組んで行くということが必要であるということが、新たな考えとして言われ出してきたわけです。

これからの21世紀というのは、従来からある福祉国家のみならず、社会そのものも福祉ということに関心を持つ、あるいは福祉に取り組んで行くという、そういうことが必要なことは間違いない。私どもは、そういうことを先取りいたしまして、福祉社会学部という名前を付けたわけでございます。

そういうことで5年経ちましたが、昨年、初めて卒業生を送り出しました。これから社会のなかで、送り出した人材がどのように活躍して行ってもらえるかということは、もう少し時間を待たないと分からないことですが、そういう人材の育成を目指して、我々は一生懸命努力いたしております。

もう1つ大事な点は、福祉社会ということについて学問的に研究するということでございます。これは本学部としては、まだまだ研究不足のところがございます。

そういうわけで、シンポジウムを開くことによって、シンポに参加していただく先生方、あるいは参加していただいた会場のみなさんと一緒に、この福祉社会というものを、どういうぐあいに考えたらいいいのかということ、を考えて行っはどうかということで、本日、こういうシンポジウムを開催させていただいたわけでございます。

シンポジストとしてのご参加の先生方をはじめとして、これからの福祉社会についての在り方、あるいはその担い手を、どう育てて行くのかということについては、色々ご議論があるかと思います。

今日のシンポを機会に、ご参加いただきましたみなさん方も、今後の福祉社会の在り方

というものをお考えいただければ、これ幸いかと思っております。

長時間にわたりますけれども、最後までご参加をいただきますように、お願いをいたしまして、福祉社会学部を代表してのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

高原

ありがとうございました。

申し遅れましたが、私、総合司会ということで、初めと終わりだけの司会ですが、福祉社会学部の高原と申します。よろしくお願いします。

それでは早速、シンポジウムの報告者、司会とコーディネーターを紹介いたしますので、それぞれ壇上のほうに上がっていただきますと思います。

まず、東京大学大学院、武川正吾先生、よろしくお願いします。

続きまして、滋賀大学経済学部、北村裕明先生です。

3人目は、本学部の築山崇先生です。

最後、司会進行、コーディネーターを務めます、本学部の小沢修司でございます。

それでは早速、司会進行の小沢修司のほうにバトンタッチいたします。

小沢

いまご紹介いただきました福祉社会学部の小沢と申します。本日の司会進行をやらせていただきます。よろしくお願いします。

お手元の封筒に入っている大学案内を見ていただきますと、先ほど学長も挨拶で申しましたが、受ける福祉ではなくて創る福祉ということを私たちの学部は考えているということが書かれているかと思います。

もう1つ目に付く言葉が、生涯発達という言葉です。地域で生涯にわたる発達、人間の発達を実現していくような、受ける福祉ではなくて住民が主体となって創り上げていく福祉や福祉社会の在り方を考えていこうというのが私たちの学部の主旨であり狙いであるわけです。

そういうなかで今日、3人の方にお出まし願って、その地域で作り上げていこうという福祉社会の中身を、担い手と主体形成というところで踏み込んで考えて行きたいというのが、今回のシンポジウムの主旨でございます。

まず武川先生ですが、東大で社会学を研究されており、最近、福祉社会について積極的に発言をされているいわば福祉社会論の第一人者です。

それから、滋賀大学の北村先生ですが、財政学を専門とされていまして、NPO論、非営利組織論の第一人者です。

最後に、本学部の築山先生ですが、本学部では生涯学習論を担当しております。

では、最初に、東京大学大学院人文社会系研究科の武川さんのほうから、「福祉国家と福祉社会の新しい関係」というテーマで報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。